



骨と関節をイメージした
整形外科アピールマーク

けい つい こう じゅう じん たい こっ か しょう 頸椎後縦靱帯骨化症



「運動器の10年」世界運動
動く喜び 動ける幸せ

● 症状 ●

この病気の症状は、①首や肩の症状(首が動かしにくくなったり肩こりなど)、②手や腕の症状(しびれ・痛み、手が使いにくいなど)(図1-a.)、③足の症状(しびれ感や脱力、歩きにくいなど)(図1-b.)に分けることができます。①は背骨の動きが悪くなって起きる症状です。②や③は神経(脊髄や神経根)が圧迫されて起きる症状です。しかし、これらの症状はこの病気でなくても起こりますので、この症状だけでは必ずしも診断できません。

通常、症状はゆっくり進行しますが、転倒や頭を打ってから急に手足が動かしづらくなったり、いままでの症状が強くなったりすることもあります。

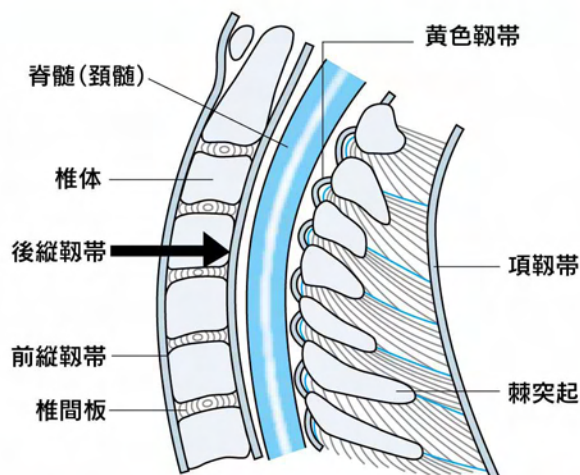
箸が使いにくい、ボタンの掛けはずしがうまくできない、あるいはつまずきやすく歩きにくいなどの症状は、病状がかなり進んだ状態と考えられます。しかし、下記の画像検査で脊髄圧迫が確認できなければ後縦靱帯骨化症とは考えにくいので、神経内科に相談する必要があります。



● 原因と病態 ●

後縦靱帯骨化症では、脊椎椎体の後ろ側、つまり脊髄の前(のど側)にある後縦靱帯が厚くなり骨に変わります(「骨化」)(図2.)。この骨化が神経(脊髄や神経根)を圧迫し、麻痺が出てくれば手術で圧迫を解除する必要があります。頸椎後縦靱帯骨化症は通常中年(50歳前後)が多く、30歳未満ではまれです。また、脊椎の動きにかかわる靱帯が骨に変わるので、脊柱の動きが悪くなります。胸椎や腰椎にも後縦靱帯骨化が生じることがあります。

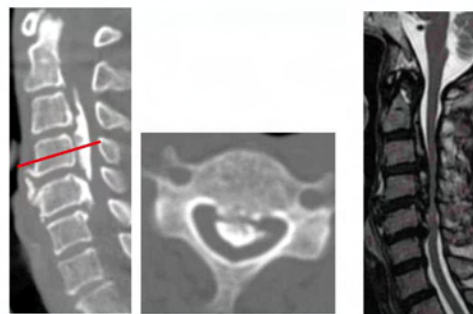
後縦靱帯骨化のあるすべての人に症状が出るわけではありません。骨化があっても、神経を圧迫している程度が軽ければ、通常は症状が出ません。また、骨化が進んで神経に圧迫があるにもかかわらず症状の出ない人もいます。



(図2)

診断

頸椎後縦靭帯骨化はレントゲン検査で通常みつけることができ、日本人の約2~4%にみられます。頸椎捻挫や頸部痛の診断目的で、偶然発見される場合も少なくありませんが、それによる臨床症状(特に神経圧迫による症状)が存在するかどうかは診断には重要です。画像検査にはほかにもCT(コンピューター断層検査)やMRI(磁気共鳴撮像検査)などがあります。骨の詳細について調べるときには、輪切りにした画像を見ることができ、CTがおこなわれます。MRIは脊髄が圧迫されている程度を見ることができ、特徴があります。



CT再構築矢状断像と横断像 MRI矢状断像

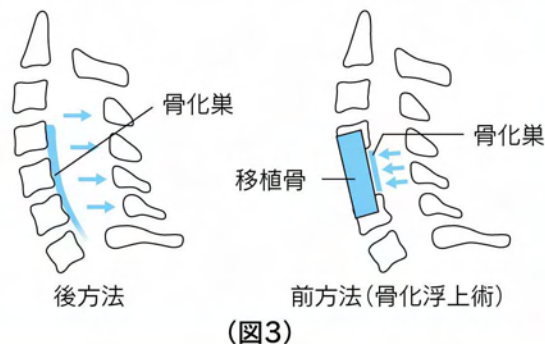
予防と治療

脊髄の圧迫症状が進むと転倒しやすくなります。後縦靭帯骨化症の場合は、脊髄の通り道である「脊柱管」が骨化した靭帯で占拠されて狭くなっています。脊髄の圧迫症状がいったん出ると、その後に麻痺が悪化する危険性がありますが、症状の進み方は個人差があります。したがって、症状の進行を予防するため生活上で注意すべきことは、首を過度に反らす姿勢を避けること(上を向きすぎない)、転倒や頭部の打撲など首に衝撃が加わるケガを避けることです。自転車やバイク、自動車の交通事故も要注意ですし、飲酒後は歩行がおぼつかなくなるので、転倒には十分な注意が必要です。

痛みが主症状の時には鎮痛剤を中心とした薬を処方し物理療法(温熱・電気療法)、運動療法などを行いますが、後縦靭帯骨化症を根本的に解決できる薬はまだありません。あんま、針灸、マッサージなどの代替治療は神経圧迫による症状を伴わない首や背中への痛みに対しては有効なことがあります、その効果や持続性に関しては不明です。一方、整体、カイロプラクティスなどで首を過度に反らすことは危険性の面から避けるべきです。

症状が全くないかあっても軽度で、画像検査で後縦靭帯骨化があるだけの場合、予防的な手術を積極的に勧める根拠はありません。しかし、神経圧迫による症状や医学的所見が明らかであれば、手術が必要です。

頸椎後縦靭帯骨化症に対する手術には、後ろ側の項(うなじ)を切開する後方法(主に「椎弓形成術」あるいは「脊柱管拡大術」と、首の前を切開する前方法(主に「前方除圧固定術」あるいは「骨化浮上術」)があります(図3)。後方法は、後縦靭帯骨化はそのまま残し脊柱管を広げる手術で前方法に比して手術時間が短く、合併症が少ないと言われています。一方前方法は、後縦靭帯骨化を摘出あるいは浮上させて骨を移植する難易度の高い手術です。いずれの手術法を選択するかは、骨化している部分の厚さや範囲、頸椎のわん曲形態、合併症の有無、CTやMRIの画像検査などを総合的に判断して決めることになります。



引用文献(図1, 2, 3. は文献1からの引用)

1. 日本整形外科学会診療ガイドライン委員会, 頸椎後縦靭帯骨化症ガイドライン策定委員会, 厚生労働省特定疾患対策研究事業「脊柱靭帯骨化症に関する研究」班編集: 患者さんのための頸椎後縦靭帯骨化症ガイドブック. 南江堂, 2007
2. 岩崎幹季 5. 頸椎後縦靭帯骨化症. 脊椎脊髄病学 金原出版 pp.154-169, 2010.



企画・制作

公益社団法人日本整形外科学会